



1 白山神社湧水(曲谷)

(MAP①)

姉川の源流域、渓谷部に位置する曲谷の白山神社一帯は湧水地帯です。神社の御手洗の水も湧水で、周辺の家では湧水池がつくられ、生活用水として利用されてきました。一年を通して水温はほぼ一定で、積雪量もこの一帯だけは集落の半分ぐらいだといわれています。この辺りの地質は粘板岩で、湧き出る水は軟水です。夏には冷蔵庫代わりに、冬には雪かきでかじかんだ手を温めたりするなど人々に重宝され、「東草野の山村景観」を特長づける水利用です。

平成23年度に市が実施した水環境調査において、市内には多くの美しい湧き水が存在していることがわかりました。同時に、水道が普及した現代の暮らしは、かつて生活全般に利用されていたこれら地域の湧水や川、そしてその水を育む山や森と私たちのつながりを希薄化させ、便利になった反面、自然の恵みによつて生かされていることが見えにくくなってしまっています。

そこで、ありとあらゆる生命の源である「水」と私たちの暮らしを再び結びつけ、身近な水やそれを取り巻く自然環境とのつながりを多くの方に知つていただき、水源の里まいばらの美しい水環境を次世代に受け継いでいくために、平成24年9月に有識者と市民で構成される選定委員会において「未来に伝えたい・まいばらの水」を選定しました。

《選定のポイント》

- ①景観的価値、自然環境としての価値
- ②地域との関わりや水文化としての価値
- ③歴史的な価値



3 桶水(小泉)

(MAP③)

伊吹山麓、小泉集落の棚田の上に、滔々と流れ出る湧水「桶水」があります。幻の伊吹城の用水であつたともいわれており、江戸時代、山形藩によってつくられた三方石畳み方式の水路は貴重な文化遺産で、歴史ある湧水です。源流は大富川不動滝、あるいは美濃からの伏流水などともいわれていますが、詳しいことはわかつていません。昔から地域の人々に田用水や生活用水として利用されてきました。



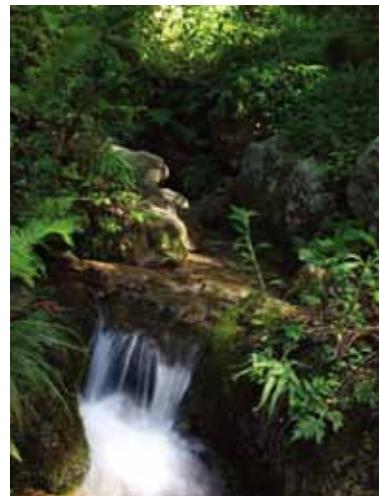
2 奥泉口(小泉)

(MAP②)

奥泉は縄文の遺跡です。

また、この近くの伊吹山の中腹、標高約450mあたりに、かつて太平寺と呼ばれる寺院がありました。伊吹山四ヶ寺の一つであり、中世には京極氏により城郭化されました。この太平寺城跡の山麓のあちこちから水が湧き出し、太古からの湧水が数千年の歴史とともに溢れ出ています。

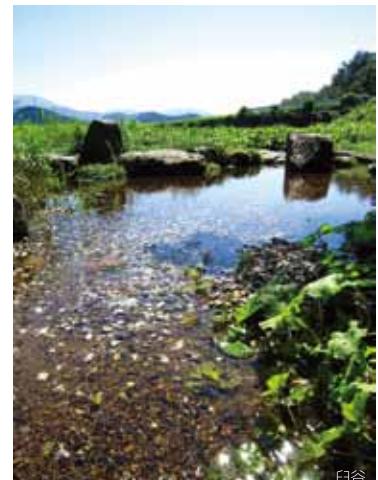
4 ケカチの水(上野) MAP④



※ P40 「水にまつわるエピソード(その⑫)」
参照



6 白谷・小碓谷の湧水(春照・間田) MAP⑥⑦



昔はこの辺り一帯は森で、水量も今よりもかなり多く至る所から湧き出しており、どこが川か見分けがつかないほど一面に水が溜まつっていました。

小碓の清水、小碓の泉とも呼ばれ、日本武尊が山を降りて、この清水を飲んで目覚めたという伝説が残されています。



小碓谷の湧水

湧水は水温が一定で夏は冷たく冬は暖かいため、重宝されました。昔は水温が一定で夏は冷たく冬は暖かいため、重宝されました。白谷は春照集落から少し離れているため、生活用水としての利用は少なかつたようです。小碓谷の湧水は、間田集落で田用水や洗い物の水として利用されていました。かつて湧水の小川沿いにはたくさんの洗い場があり、身を清めるための池もあつたといわれていますが、今は埋まってしまっています。

湧水は水温が一定で夏は冷たく冬は暖かいため、重宝されました。昔は水温が一定で夏は冷たく冬は暖かいため、重宝されました。白谷は春照集落から少し離れているため、生活



5 行者の水(弥高) MAP⑤

弥高百坊跡から上平寺城跡に向かう道の途中に、役の行者堂(弥高護国寺を開基したといわれている役の行者が祀られています。その近くから昏々と湧き出る清水は、弥高寺を支えた水といわれ、またかつては集落の水源として使われ、涸れることはありません。岩窟の右手に身を清めるための池もあつたといわれていますが、今は埋まってしまっています。

7 白清水(柏原) MAP⑧



古くから、白清水または玉の井と呼ばれていました。中世の仏教説話「小栗判官照手姫」には、姫の白粉で清水が白く濁つたことから白清水といわれるようになりましたとあります。また、伊吹山の神に打ち惑わされた日本武尊が、この清水を飲んで正気づいたという伝説が残されています。



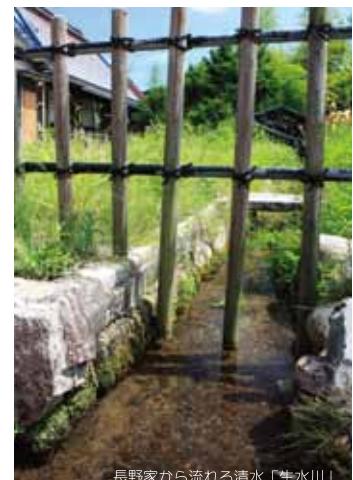
8 子宝の水(梓河内) MAP⑨

靈仙山麓にある神明神社境内に昔から湧き出ていた美しい水で、地域の人々は盆になるごとにこの水を汲んで仏壇などに供えていました。湧水を飲用することにより子宝に恵まれたという話があり、地域では子宝の水として参拝する人もいたといわれています。



10 世継の力ナボウ(世継) MAP⑩

力ナボウとは、水の湧き出ている泉と洗い場を総称した名称で、自噴井戸のことです。力ナボウという名前は、井戸をつく時に利用する金属製の棒や湧いてくる水の力ナケに由来しているともいわれています。水源は遠く靈仙山に発するといわれ、年中一定の水温(約16~17°C)を保っています。道路に面して共同利用されてきたものから、個人の家や灌用水に田んぼの中につくりとその形態は様々です。かつては、飲料水や生活用水などあらゆるものに利用され、人々の交流の場でもありました。



長野家から流れる清水「生水川」

宇賀野は地下水が豊富に湧き出る集落で、昔は各家に井戸があり、かつては自噴井戸も多く、飲料水や生活用水として利用されました。神明公園や公園近くの竹藪、坂田神明宮、戦国武将山内一豊の母・法秀院が住んでいた長野家などからは、今も清水が湧き出ており、その水が集落の中を川となって流れ、琵琶湖へと注いでいます。

9 宇賀野湧水群(宇賀野) MAP⑪

11 十王水と西行水(醒井)

MAP ⑫⑬



十王水は中山道沿いにあり、昔、淨藏貴所が山の岩石の下をへこめたところ、清水がコンコンと湧き出し、その後いかなる大干ばつの時も水が涸れることないと伝えられています。近くに十王堂があつたため、後世になつて十王水と呼ばれるようになりましたといわれています。

また、同じく中山道沿いに湧き出る西行水には、西行という僧侶に一目ぼれした茶店の娘が、西行の飲みほした茶の泡を飲んだところ身ごもり男の子が生まれ、これを聞いた西行が「まことに我が子なら元の泡に戻れ」と唱えたところ泡に消えました。いう昔話が残されています。

「まいばらの水」イメージキャラクター “スイナちゃん”

「まいばらの水」イメージキャラクター、水の妖精“スイナ”です。市民のみなさんから応募いただいた17点の名前の中から、小学2年生の女の子が考えてくれた名前が、米原の水環境を考える市民会議「スローウォーターなまちづくり会議」で、私の名前として選ばれました（平成25年9月）。市民委員の方々から、「子どもたちにも親しみを持ってもらえそう」、「妖精のイメージに合っている」「小学生が考えてくれたのがうれしい」などといった点が評価されました。

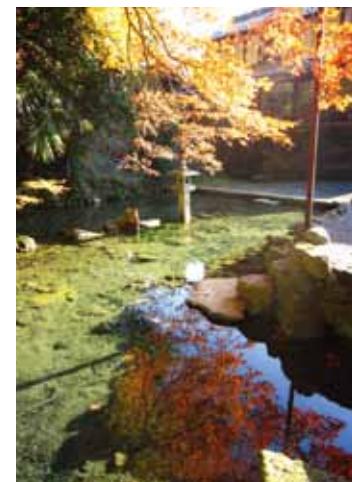
私は、まいばらの美しい水に棲む妖精です。水源の里の美しい水環境をみんな大切にしてほしいと願っています。これから先もずっと「まいばらの水」を見守り続けます。



※各湧水の説明は、第2章と重複している部分があります。
また、湧水地点は「P75 まいばら水MAP」をご参照ください。

12 天神水(枝折)

MAP ⑭



集落の背後にある山々は石灰岩でできており、地下に浸透した雨水がここに湧き出ているといわれ、集落内を流れる枝折川へと注いでいます。この湧水は涸れることなく、昔から地域の生活用水や農業用水として不可欠な水であり、夏には冷蔵庫代わりにも利用されていました。天満宮を祀り崇められ、池中の灯籠には「灌田水」と刻まれています。